

# 馬田遺跡発掘調査報告

— 三重県阿山郡阿山町馬田所在 —

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

# 序

伊賀は、三重県の西部に位置し、特に文化面で畿内と古くから密接な関係にありま  
した。

このことは、県下最大の古墳である国史跡御墓山古墳や県下最古の古墳である東山  
古墳をはじめとして、城之越遺跡や夏見廃寺などの遺跡が多く見られることからもう  
かがえます。

今回報告する馬田遺跡の発掘調査は、県道上友田円徳院線の改良工事によって現状  
保存が困難となり、実施したものであります。

調査の結果、狭い面積ながら、阿山町内では未発見の古墳時代後期の集落跡の一部  
が検出され、新たに阿山町の歴史に書き加える成果を上げることができました。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました三重県県土整備部  
道路整備課、三重県伊賀県民局建設部、阿山町教育委員会をはじめとする関係機関各  
位及び地元の皆様には深く謝意を表し、当報告書が多くの方に阿山町の歴史を紐解く  
きっかけとなることを願って序文といたします。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與 生

# 例 言

1. 本書は、三重県阿山郡阿山町馬田に所在する馬田（ばた）遺跡（旧称馬田A・B・C遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部より執行委任を受けて、平成10年度に一般道上友田円徳院線県単道路改良工事に伴って実施したものである。
3. 調査の体制は以下の通りである。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 技師 川畑 由紀子
4. 当報告書の全体の編集・執筆、写真撮影は川畑由紀子が行った。その他作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。
5. 挿図の方位は、全て国土座標第VI系の座標北で示している。なお、真北は座標北の西偏 $0^{\circ}6'18''$ 、磁北の方位は真北に対し西偏 $6^{\circ}30'$ （国土地理院、昭和61年度）である。
6. 本書に記載した遺構・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1997年版）に準拠している。
7. 当報告書での用語は以下の通り統一した。  
つき…「坏」があるが、「杯」を用いた。  
わん…「碗」「椀」があるが、「椀」を用いた。
8. 当報告書で用いた遺構番号は、通番となっている。  
また、番号の頭には、遺構の見た目の性格にから以下の略記号を付けた。  
SB：掘立柱建物 SD：溝 SR：流路 pit：柱穴、小穴
9. 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。
10. 当報告書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。
11. 発掘調査においては、阿山町在住の各位や阿山町教育委員会、及び県伊賀県民局建設部等にご協力いただいた。また、藤井尚登氏（阿山町）には様々な御教示をいただいた。記して感謝する次第である。
12. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I. 前言	1
1. 調査の契機	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の方法	1
II. 位置と歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
III. 調査の成果	6
1. 遺構	6
2. 出土遺物	10
IV. 結語	14
1. 須恵器の一群について	14
2. 龍山古墳	14
3. 馬田の中世城館	15

# 挿図目次

第1図 馬田遺跡と周辺の主要遺跡	2
第2図 調査区地形図	3
第3図 調査区配置図	5
第4図 S B 1 平面図	6
第5図 遺構平面図	7～8
第6図 S B 2 平面図	9
第7図 pit土器・柱材出土状況図	9
第8図 S R 34 板材・土器出土状況図	9
第9図 古墳時代の土器	11
第10図 中世以降の土器	13
第11図 龍山古墳採集遺物	14

# 表目次

第1表 遺物観察表	12
遺物観察表凡例	13

# 図版目次

図版1 調査前風景	17	図版4 pit 33 柱材出土状況	20
県道北部分西地区	17	S R 34 板材・須恵器出土状況	20
県道北部分西地区	17	図版5 出土遺物	21
図版2 県道北部分東地区	18	図版6 龍山古墳遠景	22
作業風景	18	龍山古墳	22
県道南部分	18		
図版3 pit 17 土器出土状況	19		
pit 21 土器出土状況	19		

# I. 前 言

## 1. 調査の契機

県道上友田円徳院線は、滋賀県から伊賀町柘植に繋がる通称伊勢道から上友田集落で分岐し、阿山町円徳院へと繋がる道路である。現在は、この地域に住む人々の重要な生活道となっている。しかし、その道路幅の狭さと交通量の増加があいまって、自動車の対向に著しく支障をきたしていた。そのため、部分的に道路を拡幅することが計画された。

当三重県埋蔵文化財センターは三重県関係部局への事業照会によって上記の事業を知った。事業地周辺には、周知の遺跡である馬田A・B・C遺跡(当時、遺跡番号阿山町234)が所在することから、平成7年度に拡幅部全体にわたって分布調査を実施し、その上で平成8年度に試掘調査(第3回)を行った。その結果、試掘坑4～5の部分で遺構・遺物が、試掘坑6～7では遺物のみが確認された。このことから、この地点にまで遺跡が広がっているものと判断した。その後の協議の結果、現状保存が困難であるため、記録保存という形で馬田B・C遺跡(当時)の緊急発掘調査を行った。

## 2. 調査の経過

### (1) 調査経過概要

調査は9月下旬に重機による表土掘削を行う予定としていたが、台風7号・8号の襲来と雨の影響から、10月2日から開始し、10月8日から人力掘削を開始した。10月中は雨続きで、その上現場は排水が悪く、実質的に調査は5日間しか行うことができなかった。11月に入ってようやく好天が続き、11月中旬に調査を終了することができた。

発掘調査は初めてという方が多かったが、毎日の排水作業の中、調査の実施にあたってご協力いただいた。御名前を記して心からお礼申し上げます。船見信一・船見昇・船見一徳・森本光子・森本稔・森田敏子・森田鏡市・山本茂・山本順子・山本秋実

### (2) 調査日誌(抄)

9月16日 現地での打ち合わせ(森川、川畑)。

9月22日～10月1日 台風8・7号、雨が続く。

10月2日 県道北部分西地区から表土除去(森川、船越重伸、松本功)。

10月7日 道具搬入(川畑、中川明)。

10月8日 作業員作業開始、天気不安定。包含層掘削。

10月14～16日 降雨のため作業中止。

10月22日 県道北部分西地区上面での写真撮影、平板実測(川畑、松田久司)。

10月27日 重機による包含層掘削。ようやくはっきりした遺構を検出。

10月29日 排水作業、検出。直径40cmほどのピットが見られる。掘削開始。

11月5日 西地区の写真撮影、東地区の遺構掘削。ピットから古墳時代後期の土師器椀・壺、甕が出土。

11月9日 東地区写真撮影。

11月11日 県道南部分土層図作成。

11月12日 S R 34 掘削、須恵器など出土。

11月16日 写真撮影、現地での作業終了。藤井尚登氏来訪、御教示を頂く。

11月19日 道具搬出。

11月24日 現地引き渡し(森川)。

12月10日 馬田公民館で地元説明会開催(森川川畑)。約30名の参加を得た。

### (3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法(以下、「法」)などにかかる諸通知は、以下により行っている。

・法第57条の3第1項(文化庁長官宛)

平成10年8月12日付 道整第259号(県知事通知)

・法内98条の2第1項(文化庁長官宛)

平成10年10月5日付教生第1050号(県教育長通知)

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(上野警察署長宛)

平成10年12月15日付教生第8-31号(県教育長通知)

## 3. 調査の方法

### (1) 地区設定について

今回の調査ではこれまでの遺跡名に従い、県道の北部分をC遺跡、南部分をB遺跡として地区設定した。各地区内を4m四方の柵目で切って小地区を設定した。東西に任意の基準線を設定し、西から数字、北からアルファベットを付け、柵目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

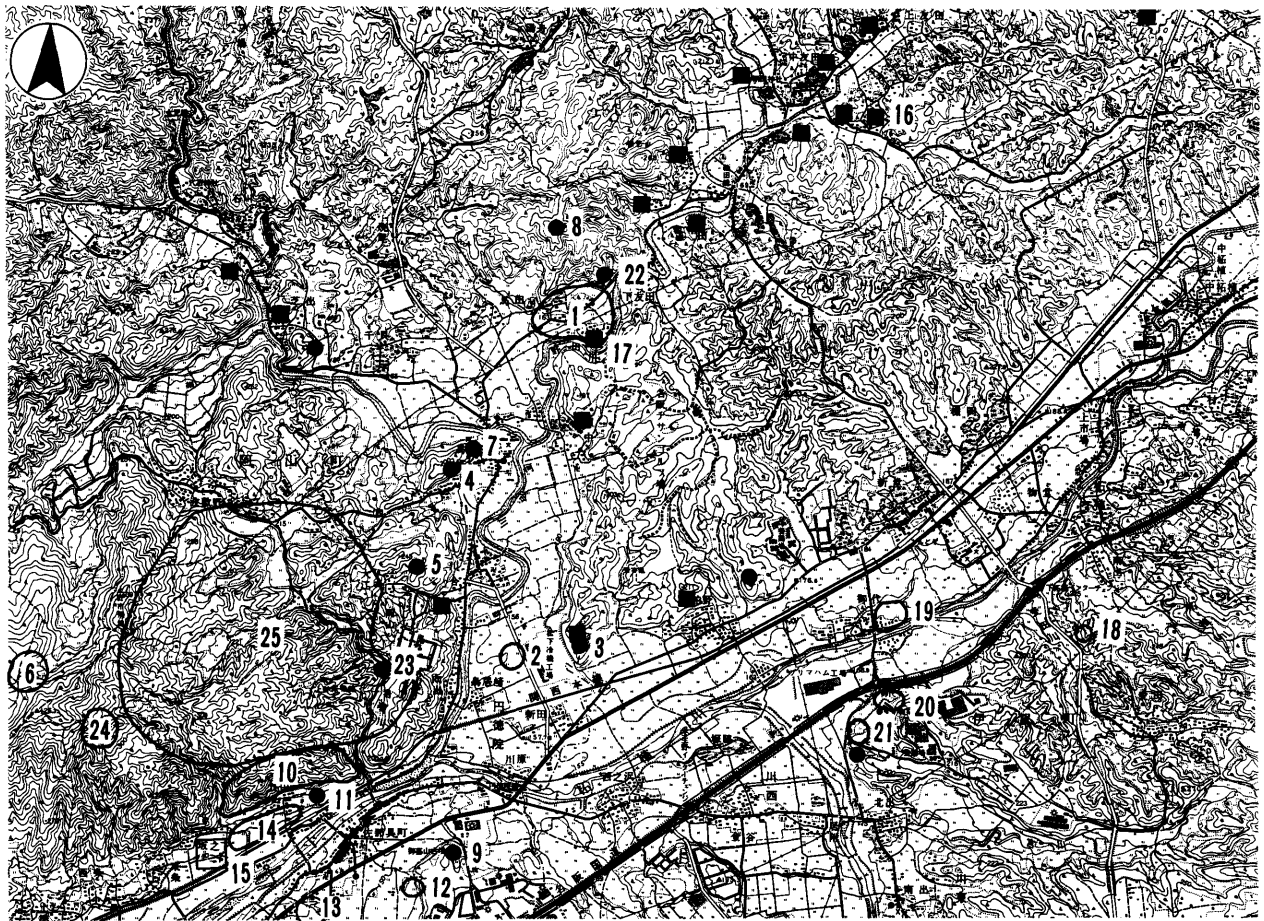
(2) 遺構図面について

遺構平面図は1/20で作成した。また出土状況図については個別に1/10の実測図を作成した。

(3) 遺跡の名称について

馬田遺跡においては以前に本格的な調査はなく、いずれも立会調査、試掘調査がなされたのみである。

その調査時に各地点を馬田A、B、C遺跡としており、今回の調査もそれに倣って行った。しかし、調査の結果、それぞれの遺跡に性格的な差はないと判断し、本報告において馬田遺跡と改称した。本報告書内では、旧B遺跡を「県道南部分」、旧C遺跡を「県道北部分」と記述する。北部分については用水路の西を「西地区」、東を「東地区」とする。



● 古墳群 ■ 城館

- 1 馬田遺跡 2 北中溝遺跡 3 東山古墳 4 宮山古墳 5 割尾山古墳 6 波敷野古墳群  
 7 御旅古墳 8 龍山古墳 9 御墓山古墳 10 外山・鷺棚古墳群 11 勘定塚古墳 12 喜春遺跡  
 13 宮ノ森遺跡 14 外山大坪遺跡 15 伊賀国府 16 菊永氏城跡 17 稲端館 18 小波田遺跡  
 19 畦垣内遺跡 20 水衛遺跡 21 天長山古墳群 22 新発見古墳群 23 キラ土古墳 24 石打古墳群  
 25 多く古墳が広がる

第1図 馬田遺跡と周辺の主要遺跡 (1:50,000) 国土地理院『上野』『甲賀』(1:25,000)より

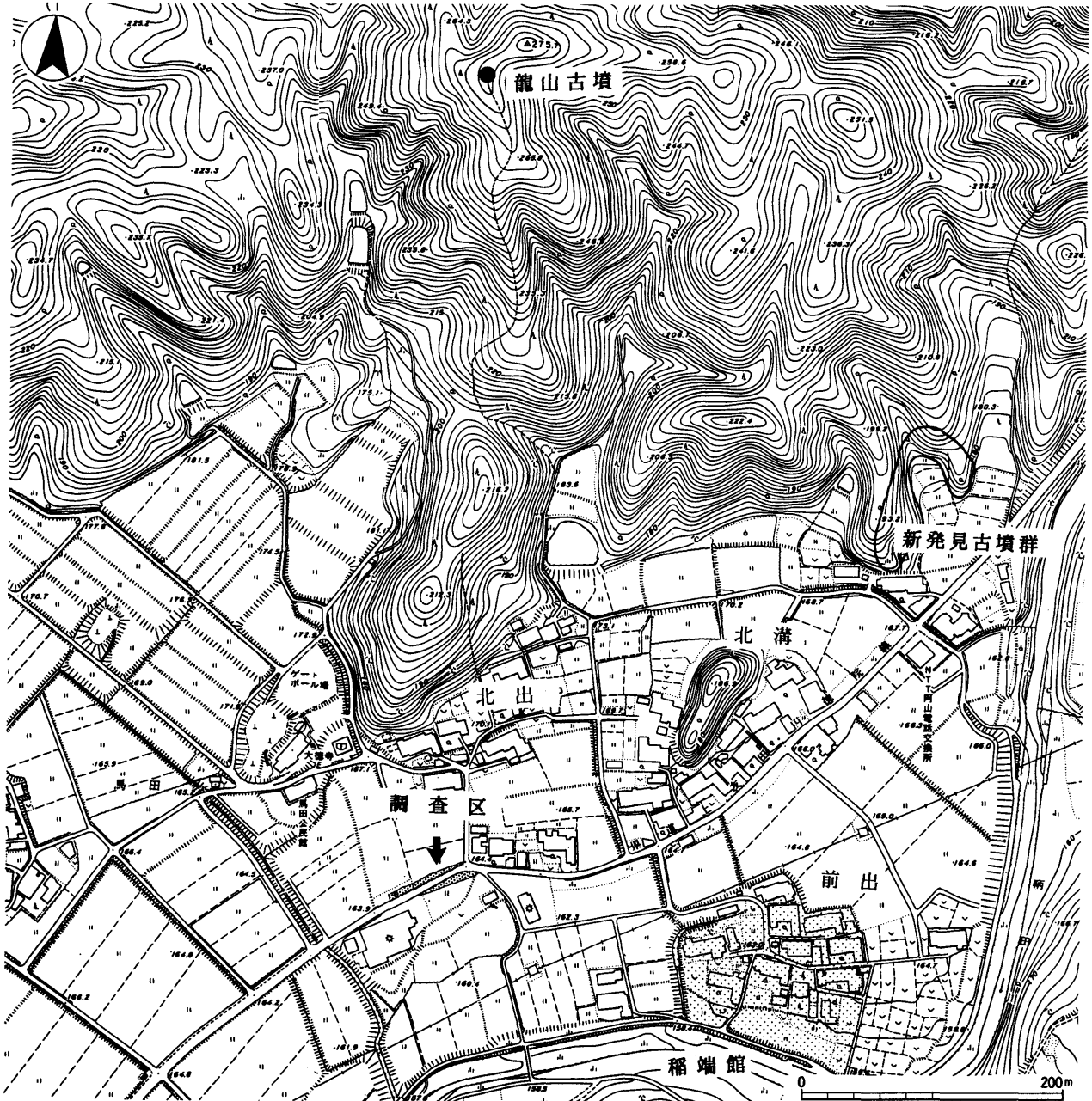
## Ⅱ. 位置と歴史的環境

### 1. 地理的環境

馬田遺跡は三重県阿山郡阿山町馬田に所在する。阿山町は伊賀盆地の北部に位置し、東は伊賀町、南に上野市、北西は滋賀県に囲まれている。阿山町は、滋賀県甲賀郡甲南町に繋がる県道春日甲南線・伊賀信楽線や滋賀県甲賀郡信楽町につながる国道422号線が通る、県境の町である。北から横山・内保・玉滝・西湯舟・東湯舟・湯舟・上友田・中友田・下友

田・丸柱・石川・千貝・馬田・馬場・田中・音羽・波敷野・川合・円徳院の各集落がある。

馬田集落の北には古琵琶湖層からなる標高200mほどの水口丘陵が、西には信楽高原系丘陵が迫る。集落の南には阿山町内保に源を発す鞍田川が西流し、その鞍田川は馬田の南西に隣接する馬場集落で河合川と合流、阿山町円徳院で木津川の支流である柘植川に流れ込む。阿山町は大半が山林で、南部に河合川・鞍田川の沖積作用による沖積地が広がる。この



第2図 調査区地形図 (1:5,000)

沖積地には水田が営まれ、近年には圃場整備が実施されている。

## 2. 歴史的環境

三重県には、律令制下では伊勢国・志摩国・伊賀国・紀州国の4国があった。伊賀国は伊賀盆地にあり、伊賀国内には阿拝郡・山田郡・伊賀郡・名張郡の4郡があった。阿山町は阿拝郡に属し、阿拝郡内には柘植・川合・印代・服部・三田・新居の六郷があり、馬田集落は川合郷に属する。

馬田遺跡(1)周辺での本格的な調査は少なく、歴史的背景は不明な点が多い。

阿山町内での生活の痕跡は古くは弥生時代後期～古墳時代前期が知られる。それ以前の縄文時代・弥生時代中期以前の遺跡は未だ知られていない。北中溝遺跡(2)では弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が11棟調査されている<sup>①</sup>。

北中溝遺跡の東の丘陵上には古墳時代前期に属する東山古墳(3)が存在する。墳丘は21.0m×17.0mの楕円形で、木棺直葬の主体部である。副葬品には四獣鏡・銅鏃・鉄剣・農具などがある<sup>②</sup>。

古墳時代後期になると陽夫多神社周辺に古墳群が造営される。宮山古墳(4)・割尾山古墳(5)は調査は実施されていないが、横穴式石室を内部主体にもつ古墳である。また、この南に続く丘陵上には多くの古墳群(6・23・24・25)が造営される。それに続く時期に宮山古墳の丘陵下に御旅古墳(7)が築かれる。御旅古墳は墳丘の封土は崩れて石室が露出しているが、石室の石の規模から古墳時代終末期の築造と推定される。この周辺に集落遺跡は確認されていない。

馬田遺跡の周辺には、古墳時代後期と思われる龍山古墳(8)がある。詳細については第IV章で触れるが、表採された円筒埴輪片から6世紀前半代に属するものと思われる<sup>③</sup>。

これに対して、阿山町の西の上野市佐那具周辺は、古墳時代前期から後期に連綿と古墳が築かれる地域である。全長188mの三重県最大の前方後円墳である御墓山古墳(9)<sup>④</sup>、外山・鷲棚古墳群(10)<sup>⑤</sup>、後期の巨石を用いた石室をもつ勘定塚古墳(11)などがある。集落遺跡としては、初期須恵器の出土が知られ

る喜春遺跡(12)<sup>⑥</sup>、竪穴住居5棟が調査された宮ノ森遺跡(13)<sup>⑦</sup>、古墳時代前期の竪穴住居9棟が調査された外山大坪遺跡(14)<sup>⑧</sup>などがあり、伊賀盆地内でも古墳時代に大勢力の存在した地域といえる。

古代、奈良に遷都されると、現在の国道25号線の辺りに東海道が通る。それより前、壬申の乱の際には大海人皇子の軍勢が名張から伊賀郡家を通り、加太越えて伊勢に入ったことが知られる。古くから伊勢に入るルートであったのであろう。

その東海道沿いの上野市外山に伊賀国府(外山地区)(15)<sup>⑨</sup>の所在地が比定され、その内容が近年の調査で徐々に判明しており、この地域の重要性が窺える。

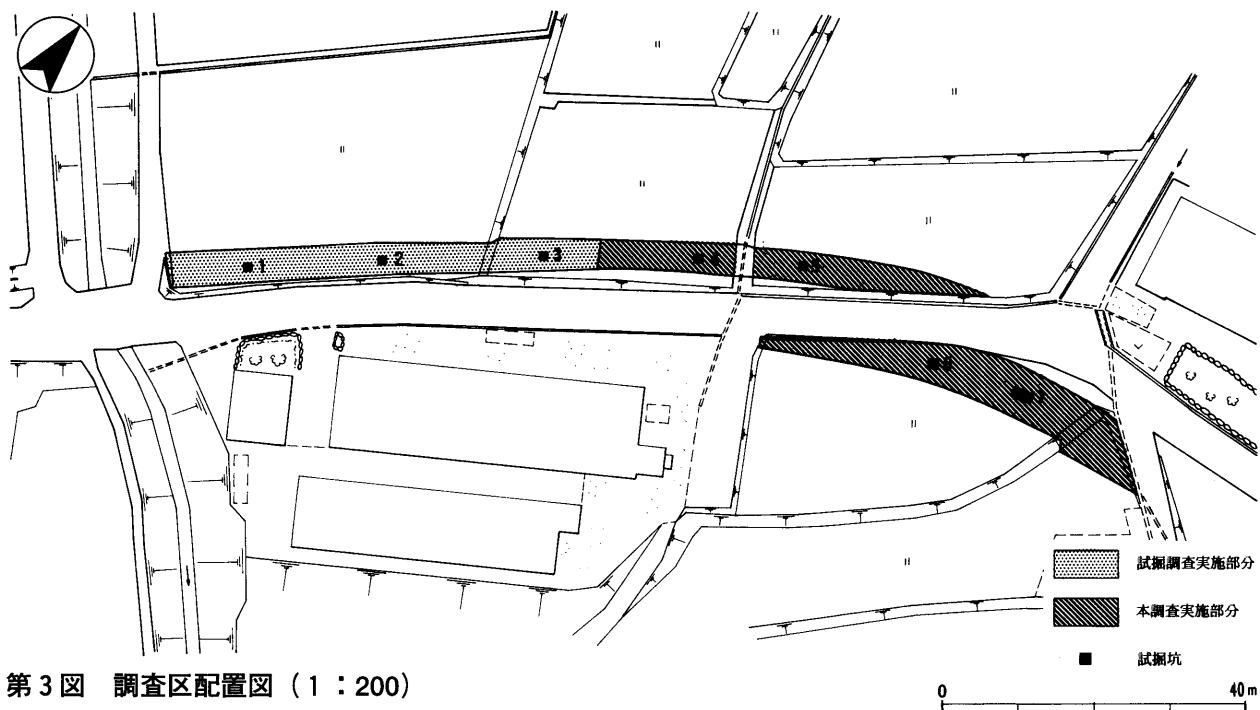
平安京に遷都されると東海道は近江を通り、甲賀郡甲南町から阿山町内保へ抜け、玉滝・上友田・伊賀町柘植を通り加太越えに至るルート(通称伊勢道)が採用される。その後、仁和2(886)年に滋賀県土山町から鈴鹿峠を越える阿須波道に替わる。

阿山町内保から玉滝・上友田を通るルートは、織田信長による伊賀攻めの際に織田の軍勢が通ったことが知られており、この街道沿いには76ほどの中世城館が築かれる。本格的に調査が行われたのは、上友田に所在する菊永氏城跡(16)である。標高190mほどの丘陵上に南北約150m、東西120mの規模で築かれている。遺構には、土塁・空堀・井戸・柱穴・溝・門跡などがある<sup>⑩</sup>。

馬田には詳細のわからない城館がある。『三国地誌』によると、馬田には舟見勘解由宅址、山本鞠負宅址、加山氏宅址、森本氏宅址、小林氏宅址があるが、何れも位置などの詳細は不明である<sup>⑪</sup>。その内、前出集落には居館推定地である稲端館(17)が所在する<sup>⑫</sup>。調査は行われていないが、堀が現在も生活用水路として利用されている。

以上見てきたように、馬田遺跡の位置する伊賀盆地北部は滋賀県や奈良県と接する交通の要所という地理的な特徴が、古墳時代から続くこの地域の優位性の一因であると言える。しかし、佐那具周辺地域に対し、阿山町馬場・馬田・田中地域は沖積平野が広がり、古墳時代終末期には御旅古墳という巨石墳が築かれ、条里制が敷かれたことなどから古墳時代





第3図 調査区配置図（1：200）

から開発の行われた地域といえる。が、古墳時代の集落は調査の少なさもあろうが、確認されていない。

〔註釈〕

- ① 「北中溝遺跡」(『昭和62年度三重県埋蔵文化財年報18』1978年)
- ② 仁保晋作「阿山町東山古墳の遺構と遺物」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号、1992年)
- ③ 平成5年9月、阿山町教育委員会藤井尚登氏(当時)が立会
- ④ 山本雅晴「御墓山古墳の検討—伊賀地方における前期古墳の編年的位置をめぐって—」(『考古学論集I』考古学を学ぶ会編、1985年)
- ⑤ 三重大学原始古代史部会『鷲棚1号墳測量調査報告』1991年
- ⑥ 山本雅晴『喜春遺跡発掘調査報告遺構編』上野市教育委員会、1982年
- ⑦ 山本雅晴『宮ノ森遺跡発掘調査概要』上野市教育委員会1979年
- ⑧ 川戸達也「外山大坪遺跡」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第一分冊、三重県教育委員会、1992年)
- ⑨ 泉雄二・服部久士『伊賀国府跡(第4次)発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター、1992年  
吉澤良「上野市外山 伊賀国府跡」(『伊賀国府跡・箕升氏館跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1993年)

福田典明『追越遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1996年

穂積裕昌「初期阿拝郡衙関連遺跡についての考察」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号、1997年)

- ⑩ 岡本武和・藤井尚登『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町遺跡調査会、1987年
- ⑪ 『伊賀の中世城館』伊賀中世城館調査会、1997年
- ⑫ 「稲端館」(『伊賀の中世城館』伊賀中世城館調査会、1997年)

### Ⅲ. 調査の成果

#### 1. 遺構

##### (1) 基本層序

調査区は西に流れる鞆田川の右岸の、自然堤防上にある。標高は165.0m前後である。基本的層序については、耕作土・床土の下に2～3層の旧耕作面があり、その下に中世以降の遺物を含む暗灰黄～黒褐色土層が堆積し、黄橙～明黄褐色の遺構検出面となる。現地表面から遺構検出面までの深さは、県道北部分で50～70m、県道南部分で40～80mである。

##### (2) 各遺構の概要

今回の調査では、調査区が約400m<sup>2</sup>と狭いながらも、古墳時代後期の遺構を検出した。しかし、当初予想していた中世以降の明確な遺構は検出できず、まとまった遺物も確認できなかった。

##### a. 古墳時代後期

掘立柱建物1棟・溝1条・流路、その他に性格の判断できないpitを多く検出した。以下、各遺構ごとに述べていきたい。

##### SB1

東西5間×南北2間以上である。柱間は1.5～1.6mである。柱穴は直径約40cmで、深さは検出面から40～50cmである。柱穴内からは、細片ながら須恵

器・土師器が出土した。出土遺物は古墳時代後期の所産と考えられることから、SB1は古墳時代後期に建てられたものと思われる。

##### SD27

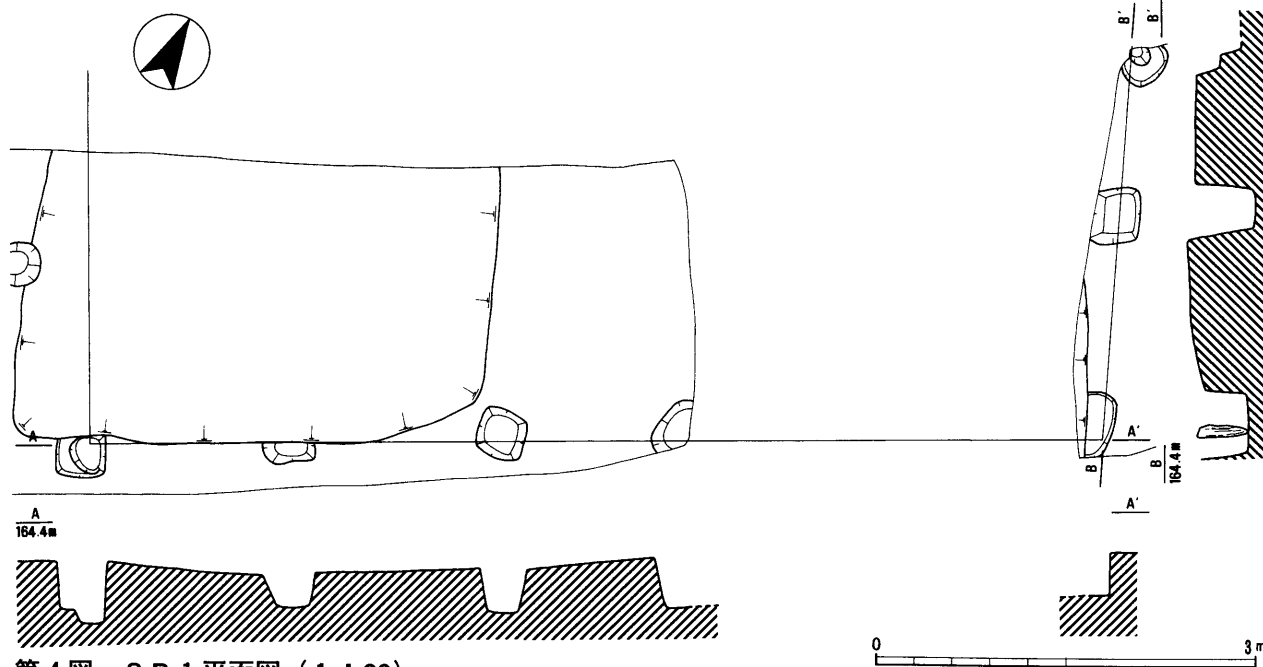
幅44cm、深さ30cmの溝である。自然木が多く堆積していた。出土した土器から、SB1の時期よりもやや下るものと思われる。

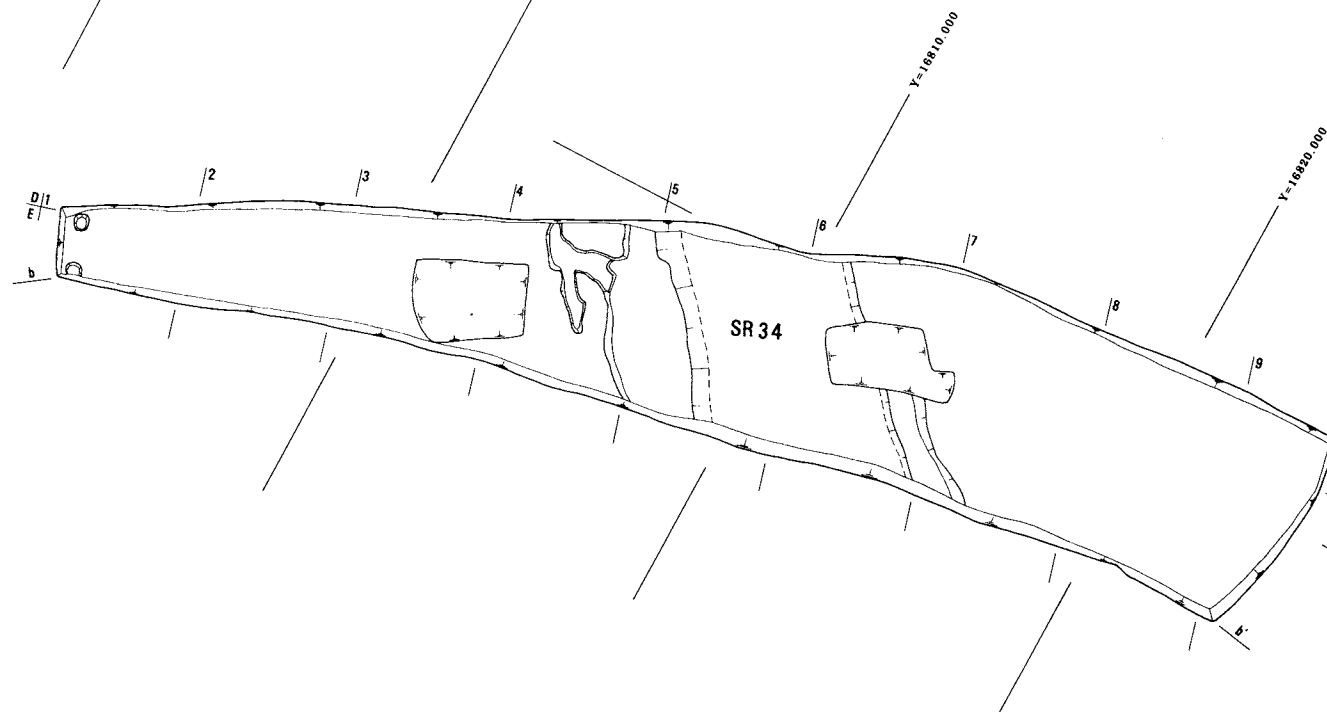
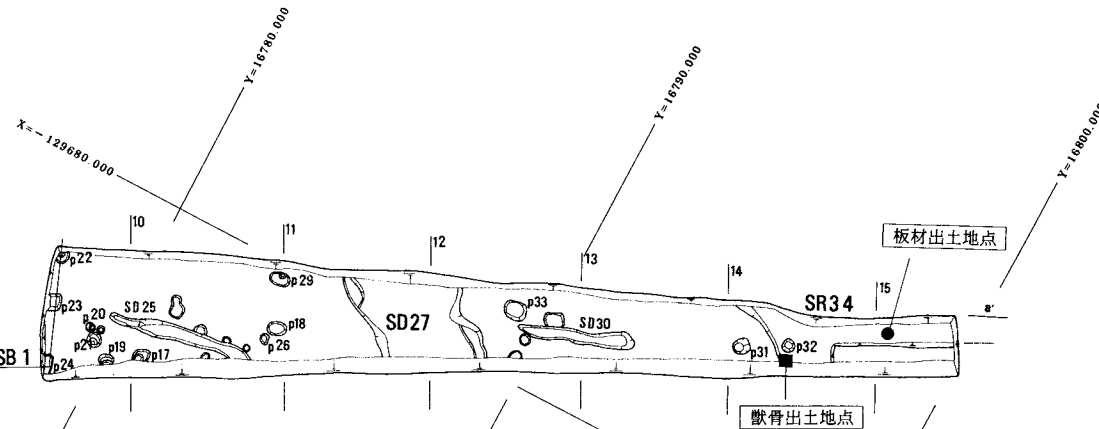
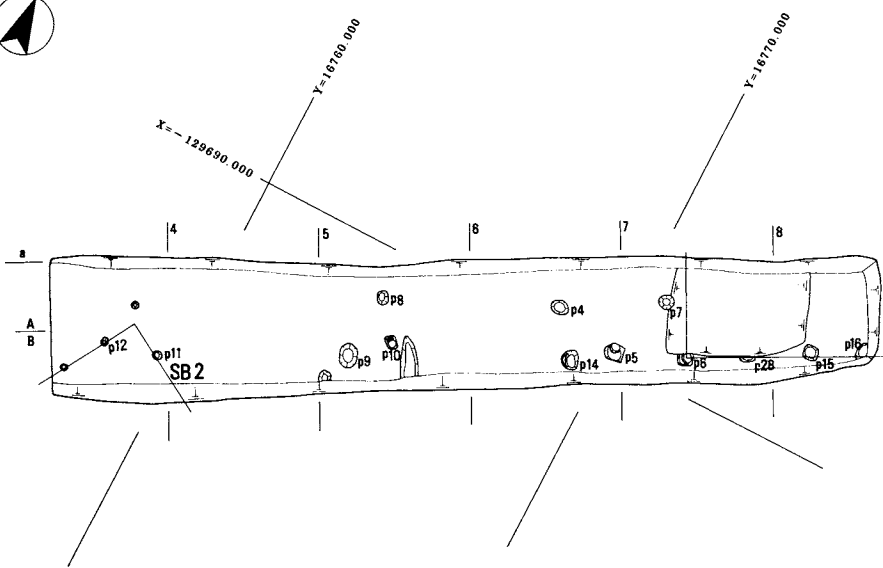
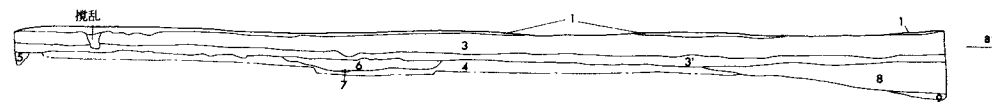
##### pit群

pit17からは土師器椀(1)が出土した。pit底から約20cm浮いた状態であった。

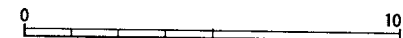
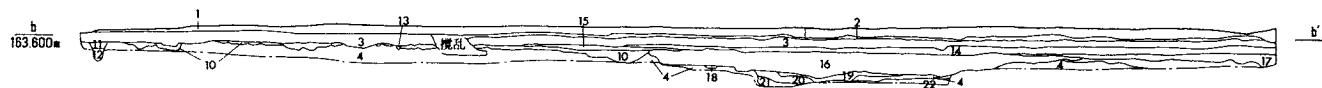
pit21からは土師器壺(3)、土師器甕(4)が出土した。pitの底に長さ15cm程の細長い石があり、その上に土師器甕が、甕口縁部分に土師器壺が据わった状態で出土した。このことから、土師器甕は壺を据えるために破碎されたものと思われる。pit17・21は、柱材が入る余地のないことや土器の出土状況から、土器を故意に埋納したものと思われる。

pit31・pit32・pit33では、柱材が腐食することなく遺存していた。pit31の柱材は遺存する長さはあるが、厚さがほとんどなく、大半が腐食したものと思われる。pit32の柱材は直径10cmである。後述するpit33の柱材に比べて脆弱である。pit33の柱材は直径12cmで、根元部分には伐採痕が見られた。

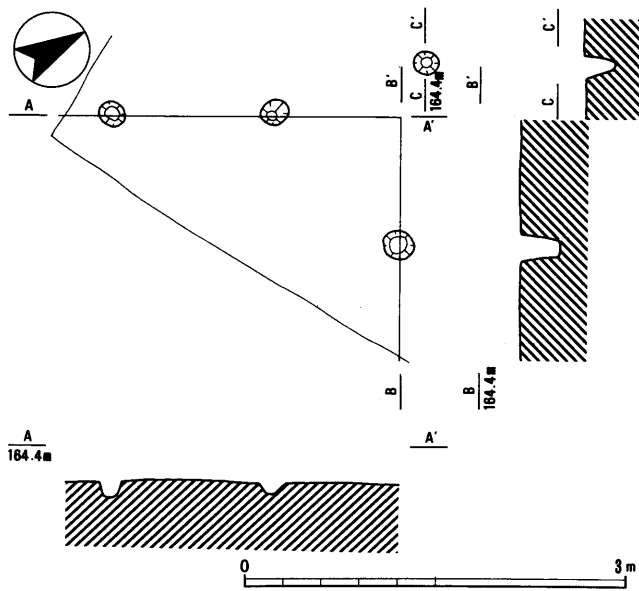




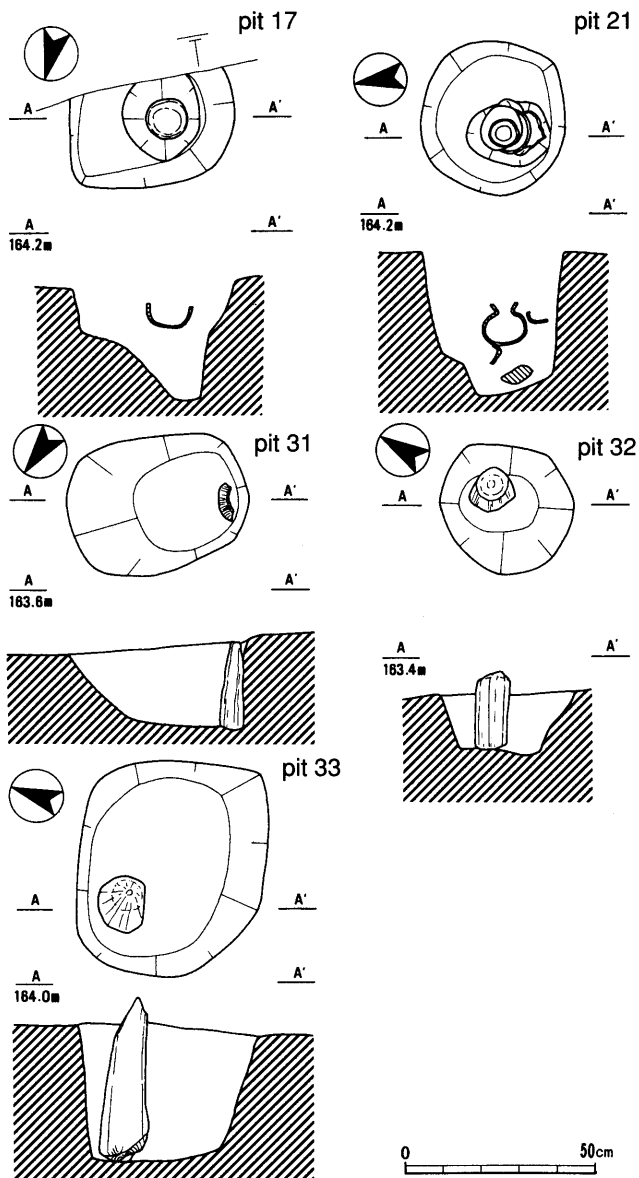
- 1 耕作土
- 2 耕作土
- 3 灰～灰オリーブ色砂質土 (5Y 5/1～5/2)
- 4 灰～灰オリーブ色砂質土 粗砂混じり (5Y 5/1～5/2)
- 5 黄橙～明黄褐色砂質土 粗砂混じり (10YR 7/8～6/8)
- 6 灰～オリーブ黒色粘質土 (10Y 4/1～3/1) < pit 2 2 埋土 >
- 7 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) } < SD 2 7 埋土 >
- 8 灰色粗砂 (7.5Y5/1)
- 9 灰～暗灰色粘質土 (5Y5/1～N3/) } < SR 3 4 埋土 >
- 10 黄灰色粗砂 (2.5Y6/1)
- 11 灰色粗砂 (5Y 6/1～5/1)
- 12 灰～オリーブ灰色粘質土 粗砂混じり (N5/～2.5GY5/1) } < pit 埋土 >
- 13 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY4/1～3/1)
- 14 褐灰色粘質土 (10YR 5/1)
- 15 灰～灰オリーブ色シルト 粗砂混じり (5Y 5/1～5/2)
- 16 にぶい黄～オリーブ褐色シルト 粗砂混じり (2.5Y 6/4～4/6)
- 17 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/3～4/4) < SR 3 4 埋土 >
- 18 にぶい黄褐～褐色シルト (10YR 4/3～4/4)
- 19 灰色粗砂 (N5/)
- 20 オリーブ黒色シルト灰色粗砂・炭化物混じり (5Y 3/1～3/2)
- 21 灰～オリーブ灰色弱粘質土 植物遺体等有機物多く堆積 (10Y4/1～4/2) } < SR 3 4 埋土 >
- 22 暗オリーブ灰色シルト 粗砂多く含む (5GY 4/1)
- 23 灰色粗砂 (10Y5/1～4/1)



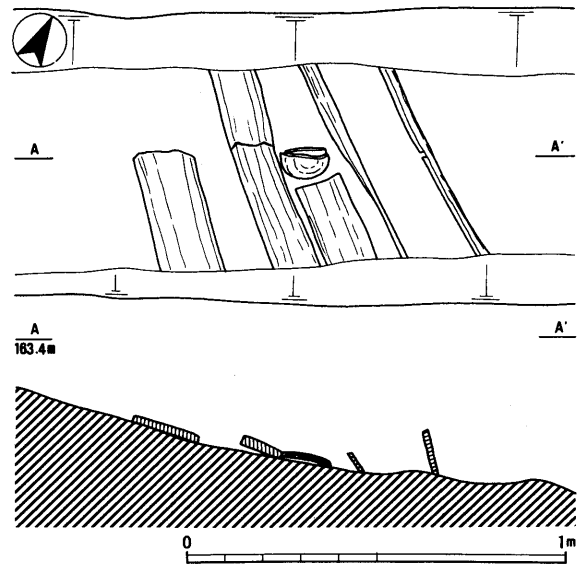
第5図 遺構平面図 (1:200)



第6図 SB 2 平面図 (1 : 60)



第7図 pit土器・柱材出土状況図 (1 : 20)



第8図 SR 34 板材・土器出土状況図 (1 : 20)

いずれからも土器等は出土しておらず、時期は不明であるが、埋土・pitの規模等からSB 1の時期に属するものと思われる。柱材が遺存することから、掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。

#### SR 34

県道の南北に渡って検出した。幅12.0m、深さ1.0m以上の流路である。県道北部分では調査区が狭くなる部分にあたり、現地表面から1.5m以上下がることから、作業の安全を考え、調査区の1/2、幅約50cmのみを掘削した。

流路肩口からは獣骨が若干出土した。また、木が多く出土した。取り上げることはできなかったが、板状に加工されている。SR 34周辺の建物の建築部材か、若しくは護岸の部材の可能性はある。

県道南部分においても、交通量が多く道路から約2.0m下がることから、SR 34の掘削は第一層のみとし、一部にトレンチを設定した。出土遺物には須恵器蓋杯、土師器碗が多くある。また、直径約70.0cmの自然木が埋没していた。

#### (2) 時期不明の遺構

#### SB 2

柱穴が直径15~20cm、検出面からの深さ10~30cmと小規模であることから、SB 1よりも高い面に建てられた掘立柱建物の可能性がある。古墳時代に属すると思われる土師器細片が出土したが、SB 1とは建物主軸が異なること、pitの規模等から時期は不明とせざるを得ない。

## 2. 出土遺物

馬田遺跡の調査では、コンテナバット10箱の遺物が出土した。遺構編でも触れたように、当初予測していた中世の遺物は細片ばかりであり、古墳時代後期の遺物は大半が流路から出土した。

それぞれ、時代を追って遺構ごとに見ていきたい。

### (1) 古墳時代の遺物 (第10図1～31)

#### pit出土遺物 (1～4)

1はpit 17から出土した土師器碗である。粘土紐積み上げの後、ナデで成形する。底部外面には、成形時に敷いたと思われる木の葉痕が残る。

2は、pit 20から出土した土師器碗の口縁破片である。全体に摩滅が激しいために製作技法ははっきりしないが、全体をナデで成形したものと思われる。口縁は外側に強くつまみあげている。

3・4はpit 21から出土した。3は土師器壺である。全体を粘土紐積み上げた後にナデを施し、ハケで調整する。4は土師器甕である。割れ断面の状況から、土師器壺を据える際に破碎したものと思われる。甕体部から底部の破片はpit内からは出土しなかったことも、その可能性を表しているといえる。全体は粘土紐積み上げた後、ナデで成形する。その後、ハケを施し調整している。

#### S D 27 出土遺物 (5～6)

前述したように、S D 27では多くの自然木片が出土したが土器は少なかった。5は須恵器杯身である。受部はやや内傾しており、後述するS R 34の須恵器群に比して新相を呈すが、底部の切り離し後の回転ヘラケズリの省略はまだ見られない。6は土師器甕である。細片であるが、全体をナデで成形し、体部はユビオサエも見られる。口縁は外側に強くつまみあげ、口縁端部は丸くおさめる。

#### S R 34 出土遺物 (7～31)

遺構編にあるように、全て第一層に属する。

8・9は県道北部分からの出土である。8は板材の間から出土した(第9図)。S R 34出土の須恵器7～19は蓋杯のみであるが、その中で、特徴的な製作技法を持つ一群がある。8・9(杯蓋)、12・13(杯身)であるが、それぞれ内面中央に同心円文状の当具痕が見られる。当具痕の大きさは直径約8.0

～8.5cmである。

10・11は当具痕の見られない一群であるが、その法量を見るとは口径17.6cm、11は口径16.2cmと他の個体に比して大型品である。10は稜から端部に向けて口縁はやや外傾気味にのびる。11も受部はやや短く、内傾する。器高も10・11とも4.8cmと口径に比して偏平な印象を受ける。この特徴から、10・11は同一グループに属するといえる。

出土した須恵器蓋杯を見ると、全体的に器形が歪む。このことから、馬田遺跡が消費地でありながら、生産地と密接な関係にある可能性が考えられる。

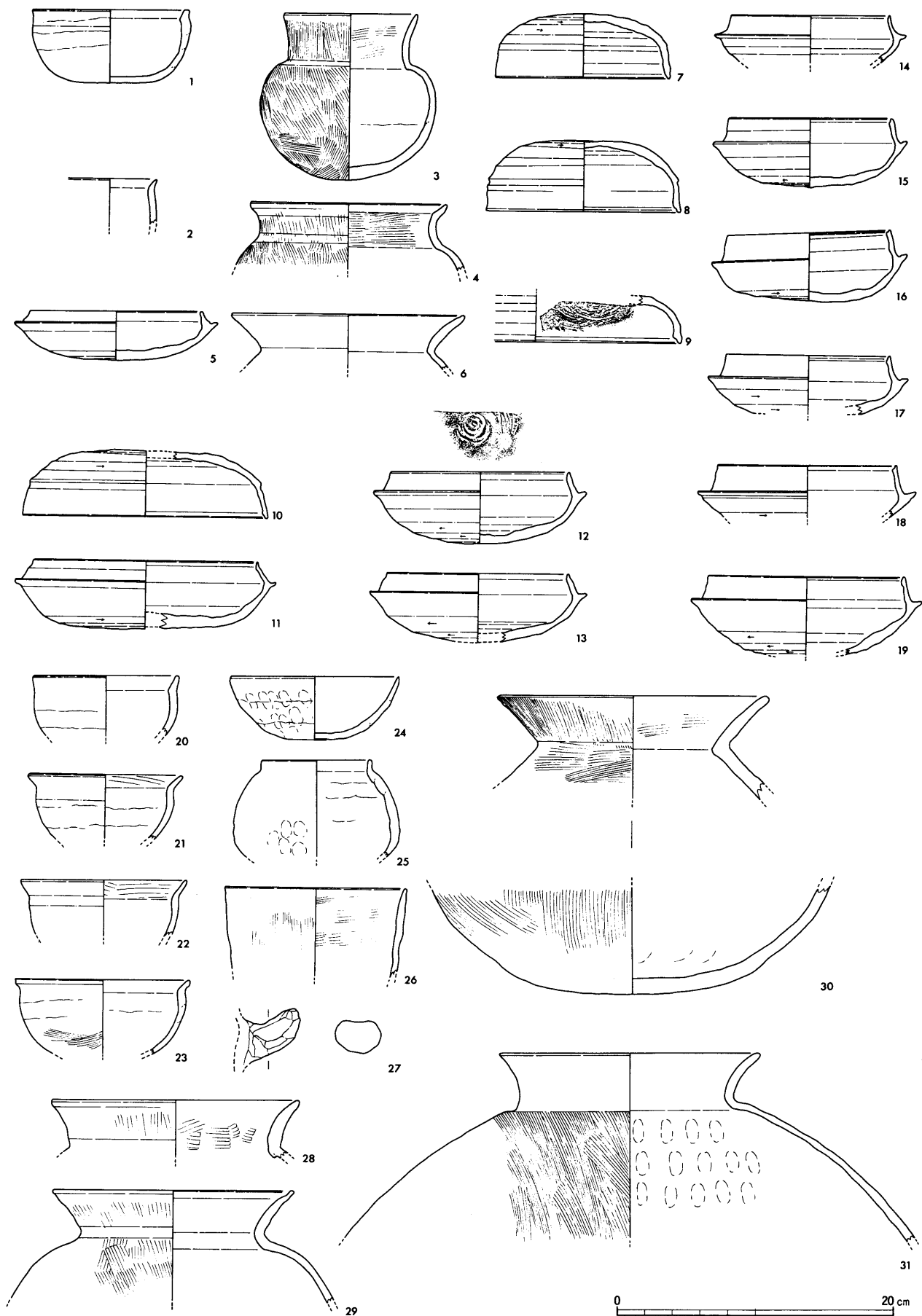
20～24は土師器碗である。体部はナデとオサエで成形し、口縁部は外側に向かってつまみあげる。21・22はその後、内側にハケを施す。23の口縁部は外側につまみあげ、端部を丸く仕上げる。24はナデとオサエで口縁部まで仕上げる。体部下半はハケで仕上げる。

25は土師器短頸壺である。頸部は短く、口縁端部は丸く仕上げる。体部はナデとオサエで仕上げる。

26は土師器直頸壺の頸部と思われる。磨滅しているが、全体をハケで薄く成形し、内側は後にナデを施す。

27は土師器把手である。他に包含層遺物で別個体の把手が2個体出土している。このことから煮沸具が存在していたことが考えられる。

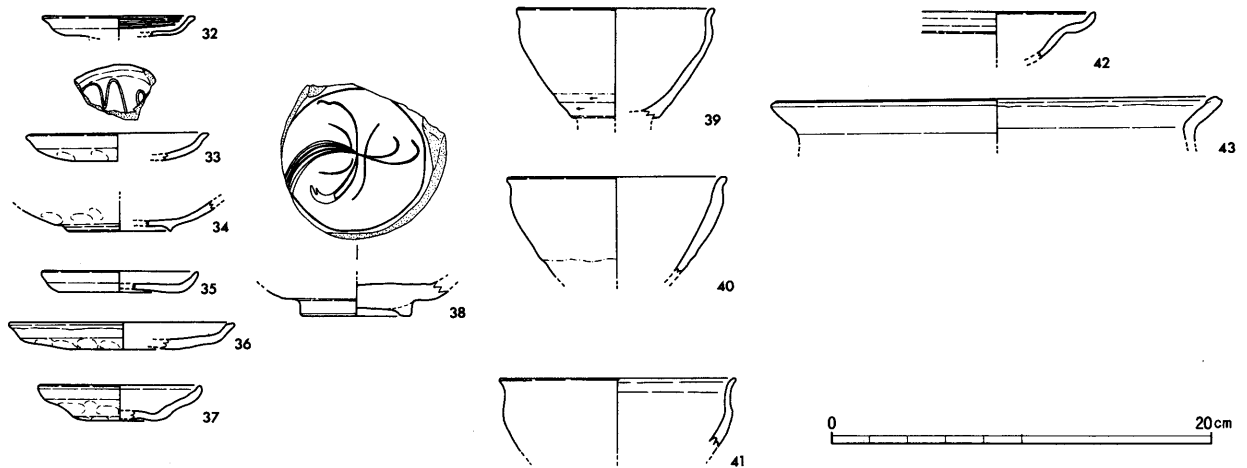
28～31は土師器甕である。完形になるものはない。全体に磨滅している。28～30は、頸部から口縁端部までナデとハケを施している。29は、口縁端部をやや強くつまみ出している。体部は内面をナデで、外面をハケで仕上げている。肩部はやや張る。30は口縁端部をやや面を持たせて仕上げる。体部が欠損しているが、外面は頸部から体部にかけてヨコハケで成形している。底部近くはハケ、底部はナデで成形する。やや丸底を呈する。31は頸部から口縁部はナデで成形し、体部内面はオサエとナデで、外面はハケで成形する。



第9図 古墳時代の土器 (1 : 4)

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構	口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	特記事項
1	001-06	土師器椀	B9-10	pit 17	11.3cm	5.3cm		オサエ・ナデ	粗	並	にぶい黄橙 ～灰褐	完形	底部に木の葉痕
2	008-01	土師器椀	A-9	pit 20	-	-		ナデ	やや密	並	にぶい橙	細片	
3	001-05	土師器壺	B-9	pit 21	9.6cm	12.0cm		外面から頸部内面までハケ、体部内面から底部ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙～ 灰黄褐	完形	
4	001-04	土師器甕	B-9	pit 21	14.0cm	-		ヨコナデー頸部内面・体部外面にハケ	粗	並	(内)黒褐色 (外)にぶい橙	口縁～体部 上端	
5	009-02	須恵器杯身	A-11	SD 27	12.4cm	3.6cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや密	並	灰白	1/2残存	全体に歪む
6	009-03	土師器甕	A-11	SD 27	17.0cm	-		ナデ・オサエ	粗	並	にぶい褐～褐	口縁～頸部 1/7残存	
7	004-01	須恵器杯蓋	D-4	SR 34	12.6cm	4.65cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや粗	不良	灰褐～灰白	1/5残存	
8	001-02	須恵器杯蓋	A-15	SR 34	14.0cm	5.1cm		ナデー当具一回転ヘラケズリーナデ	やや密	良	灰	1/3欠損	天井部内面に同心円状当具痕あり
9	001-03	須恵器杯蓋	A-13	SR 34	-	-		ナデー当具一回転ヘラケズリーナデ	やや密	良	灰白～灰	口縁1/6残存	全体に歪む
10	004-02	須恵器杯蓋	D-4	SR 34	17.6cm	4.8cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや密	並	明オリブ灰 ～灰	口縁1/6残存	
11	004-06	須恵器杯身	E-6	SR 34	16.2cm	4.8cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや密	並	灰白	1/5残存	
12	007-01	須恵器杯身	D-4	SR 34	12.9cm	5.2cm		ナデー当具一回転ヘラケズリーナデ	やや粗	良	灰白～灰	1/2残存	底部内面に同心円状当具痕あり
13	004-03	須恵器杯身	D-4	SR 34	13.2cm	5.0cm		ナデー当具一回転ヘラケズリーナデ	やや密	並	灰	1/2残存	
14	005-03	須恵器杯身	D-4	SR 34	11.5cm	-		ナデ(底部不明)	やや密	不良	浅黄橙	1/6残存	
15	001-01	須恵器杯身	D-5	SR 34	11.8cm	5.1cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや粗	良	(内)青灰(外) 灰白～灰	ほぼ完形	
16	004-05	須恵器杯身	D-4	SR 34	11.7cm	5.0cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや粗	並	灰	口縁部細片体 - 底部1/2	全体に大きく歪む
17	004-04	須恵器杯身	E-6	SR 34	12cm	-		ナデー回転ヘラケズリ	やや粗	並	灰白～灰	1/6残存	全体に歪む
18	009-01	須恵器杯身	D-4	SR 34	13.0cm	-		ナデ(底部不明)	やや密	良	灰	1/3残存	
19	005-01	須恵器杯身	E-6	SR 34	14.2cm	6.0cm		ナデー回転ヘラケズリ	やや粗	並	灰	1/5残存	
20	006-04	土師器椀	E-5	SR 34	10.2cm	-		ナデ	やや密	並	灰白～灰	1/5残存	同一個体の丸底の底部片あり
21	006-02	土師器椀	E-5	SR 34 肩口	10.8cm	-		ナデ、口縁部のみハケ	やや密	並	にぶい黄橙	1/5残存	
22	006-01	土師器椀	E-5	SR 34	12.0cm	-		ナデ、口縁部のみハケ	やや密	並	にぶい黄橙	1/5残存	
23	005-05	土師器椀	E-5	SR 34	12.6cm	-		ナデーハケ	やや粗	並	浅黄	1/2残存	
24	005-04	土師器椀	E 5-6	SR 34 肩口トレンチ	12cm	4.6cm		オサエ・ナデ	やや密	並	灰白～にぶい 黄橙	1/2残存	
25	006-03	土師器細頸壺	D-4	SR 34	8.0cm	-		オサエ・ナデ	やや粗	並	浅黄橙	1/7残存	摩滅激しい
26	007-03	土師器壺	D-4	SR 34	13cm	-		ハケーナデ	粗	並	にぶい橙	口～頸部 1/3	
27	008-03	土師器把手	D-4	SR 34	-	-	-	手捏ね	粗	並	にぶい黄橙	先端～接着面 まで	
28	007-04	土師器甕	E-5	SR 34	18cm	-		ハケーナデ	粗	並	にぶい黄橙	口縁 1/4	
29	007-05	土師器甕	D-4	SR 34	17.4cm	-		ハケナデ	粗	並	浅黄橙	口縁少量～体部 1/2	
30	010-01	土師器甕	D-4	SR 34	19.5cm	-		(外)ヨコナデ、ハケ(内)ヨコナデーハケ、オサエーナデ	粗	良	にぶい黄橙	口縁～体部上 端、底部	
31	011-01	土師器甕	D-5	SR 34	18.6cm	-		(外面)ヨコナデーハケ(内面)ヨコナデ、オサエーナデ	粗	良	浅黄橙	口縁 3/4 体部 上半	
32	003-06	瓦器皿	A-6	包含層	8cm	1.1cm		ナデ・オサエーミガキ	やや密	並	暗灰	口縁～体部 1/8	
33	003-05	瓦器皿	B-6	包含層	9cm	1.45cm		ナデ・オサエーミガキ	やや密	並	灰	口縁～体部 1/8	暗文あり
34	003-07	瓦器皿	B-7	包含層	-	-	5.3cm (高台)	ナデ・オサエー糸切り-貼り付け高台	やや密	不良	暗灰	高台部 1/6	
35	002-06	土師器小皿	B-6	包含層	8.1cm	1.1cm		ナデ・オサエ	やや粗	並	淡赤褐	口縁～底部 1/5	摩滅激しい
36	002-05	土師器小皿	B-4	包含層	12cm	1.4cm		ナデ・オサエ	やや粗	並	灰白	口縁～体部 1/10	摩滅激しい
37	002-07	土師器小皿	B-6	包含層	8.4cm	1.9cm		ナデ・オサエ	やや粗	並	灰白～灰黄	1/3残存	
38	002-04	青磁椀	B-6	包含層	-	-	5.6cm (高台)	ロクロナデー削り出し高台-施釉	密	良	釉 明緑灰	高台部完存	
39	003-02	天目茶碗	B-5	包含層	10.6cm	-	-	ロクロナデ・ロクロケズリ-鉄釉	やや密	良	釉 黒褐	口縁～体部 1/8	
40	003-03	天目茶碗	D-E7 -8	包含層	11.4cm	-	-	ロクロナデ・ロクロケズリ-鉄釉	やや密	良	釉 黒	口縁～体部 1/8	
41	003-04	天目茶碗	B-3	包含層	12.2cm	-	-	ヨコナデー鉄釉	やや密	良	釉 にぶい赤褐色	口縁～体部 1/8	
42	003-08	土師器鍋	A-6	包含層	-	-	-	ヨコナデ	やや密	並	にぶい橙	口縁細片	
43	003-01	土師器甕	B-6	包含層	23.4cm	-	-	ヨコナデ	やや粗	並	灰白～灰褐	口縁 1/8	



第10図 中世以降の土器（1：4）

(2) 中世の遺物（第11図32～45）

全て包含層出土遺物である。

32～33は瓦器皿である。32は全体をナデとオサエで成形し、内面をヘラミガキで仕上げている。33は32と同様ナデとオサエで成形し、ヘラミガキで仕上げる。

34は瓦器碗の底部と考えられる。全体に摩滅が激しいが、体部はナデとオサエで成形し、高台は貼り付けている。

35～37は土師器小皿である。35・36はナデとオサエで成形している。35は口縁端部をやや強く外につまみ出している。37は底部内面を強くなでている。口縁端部に向かって軽く内弯し、口縁端部は丸く収める。

38は青磁碗の底部である。削り出し高台を持つ。

39～41は天目茶碗である。39・40は内面～外面体部上半をロクロナデで、外面体部下半～底部はケズリで成形する。底部は欠損している。黒褐色の鉄釉を施す。41は製作技法については上2例と同様であるが、鉄釉はにぶい赤褐色である。

42は土師器鍋の口縁部である。口縁端部には折り曲げは見られない。43は土師器甕である。口縁端部は部分的に折り曲げられている。

(3) その他

pit 29から桃果種2個が出土している。当時の植生の一端を表す資料といえる。

【出土遺物観察表凡例】

当報告書に掲載した出土遺物観察表は以下の規則で表現した。観察表左より、

- 1「番号」は第9・10図と図版の番号と対応する。
- 2「実測番号」は実測図面の番号と対応する。
- 3「器種等」は見ためで判断している。
- 4「小地区」は遺物が出土した地区を表現している。数地区にわたって接合したものは、各地区名を記している。
- 5「遺構」は出土した遺構の略記号と数字で表現している。
- 6「法量」はそれぞれ計測可能なものについて計測した。「—」は計測不可能を示す。
- 7「調整・技法の特徴」は可能な限り、施された順序で記すよう努めた。
- 8「胎土」は粗密の別で記し、中間に属するものは「やや」を付けた。
- 9「焼成」は「良・並・不良」の別で記した。
- 10「色調」はその遺物の大半を占める色を記している。
- 11「残存」は「口縁」など、ある部分を限定している場合はその部分の残存度を示す。限定していない場合は全体の残存度を示す。
- 12「特記事項」は左記の項目で表現できない特徴を記した。



## IV. 結 語

今回は道路の拡幅に伴う調査のために調査区は幅狭く、得られる情報も限られた。調査の結果、古墳時代後期の集落の一部と遺物が検出されたが、ここでは今回の調査から得られた問題点を考えてみたい。

### 1. 須恵器の一群について

馬田遺跡の出土遺物は、須恵器蓋杯が大半を占めた。その中で、興味深い製作技法の見られる一群があったので、それについて考えてみたい。8・9・12・13は、第Ⅲ章でも触れたように内面中央に同心円文の当具痕が残されている。これについては、珍しいものではなく、大阪府陶邑においても存在している。三重県内においても、旧国でいうところの伊勢では少ないが、伊賀では、上野市久米山48号墳<sup>①</sup>、大多田遺跡、伊賀町菰池2号墳<sup>②</sup>、名張市尻矢3・4号墳<sup>③</sup>などから出土している。

他の例でもわかるように、須恵器蓋杯は、甕のように当具痕が観察されることは少ない。この当具はいつの段階で、どのように使用されたのであろうか。

田辺昭三氏は須恵器の製作技法を復元する上で、この当具痕についても考察を加えている。それによると、これは現在製陶で使用される「シッタ」のようなもので、須恵器蓋杯をロクロから切り離し、外面に残る切り離し痕を調整するために回転ヘラケズリを施す。その際、蓋杯を裏返しにしてロクロに置くが、口縁部がロクロに直接当たるのを防ぐために当具を内面に当てて固定したということである<sup>④</sup>。

馬田遺跡出土の例の成形方法を見ると、①ロクロナデ→②ヘラでロクロから切り離す→③外面に回転ヘラケズリ→④内面中央に1方向ナデとなる。当具痕は④のナデのために不鮮明となっていることから、②～③の段階で当具を使用した可能性がある。

田辺氏の指摘するように、回転ヘラケズリを施す際に使用したことは十分考えられる。しかし、馬田遺跡例の当具痕は、後に施されたナデのため一部消えているものの残っており、土器がさほど乾燥していない段階で当てられたものと推定できる。回転ヘラケズリは少し乾燥させた後に施すことから、それ

よりも前の段階、②ロクロからの切り離しの際に使用したことも考えられる。つまり、まだ柔らかい土器をヘラで切り離そうとすると、若干の歪みが生じる。しかし、固定するために口縁部などに手を添えるともた、歪むこととなる。そこで、内面に当具を当てて固定し、ヘラで切り離したことが考えられる。そして、そのまま若干乾燥し、回転ヘラケズリを施したと考えられる。

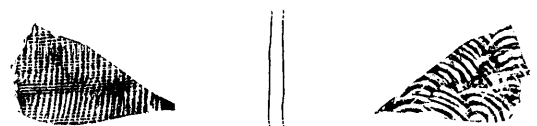
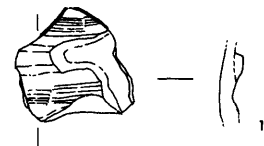
このような当具痕の見られる須恵器蓋杯は普遍的に見られるものではない。

馬田遺跡の当具痕の見られない須恵器と比較すると、当具痕の見られる須恵器群は受け部がやや低く内傾し、はっきりとは分かれませんが、前者よりやや口径が大きい。このことから馬田遺跡SR34出土須恵器においては、当具を用いる製作技法は若干の時期差を示しているといえる。

また、既に見たように伊賀出土の須恵器においても、この技法は一部に見られるのみで多くはない。このことは、製作地の問題、工人の問題に関係すると思われる。

### 2. 龍山古墳

龍山古墳は、馬田地区の北に位置する標高約257mの丘陵上に位置する。馬田遺跡とは比高約100mである。古くから祠があり、特に雨乞い信仰の山とされていたようである。しかしこの祠については、元々は現在の伊賀木工所の西隣付近にあったものを、



第11図 龍山古墳採集遺物(1:4)

龍山山頂に移したということである。龍山古墳は平成5年に石碑を建立する際、掘削時に円筒埴輪片・須恵器甕片を採集したことから、その存在が明らかになった。

龍山古墳は東西23.0m・南北24.0mの円墳である。外部施設については葺石は確認できず、埴輪を巡らせていたと推定される。主体部は石室の石が見られないことから、木棺直葬と推定される。

円筒埴輪は、川西編年<sup>⑥</sup>でいうところのV期に属する。須恵器は、細片のため時期等はいえないが、墳丘上祭祀に伴う物とも考えられる

また、龍山古墳から東に連なる丘陵上にマウンドらしいものが確認でき、未確認の古墳群の可能性が高いという指摘もある<sup>⑦</sup>。これについては今後も踏査が必要であるが、立地の状況から龍山古墳は単独古墳とは考えられず、この未確認の古墳群の盟主的古墳であった可能性が高い。

龍山古墳の築造時期は、円筒埴輪から6世紀前半代と考えて大過ない。この時期は今回調査を行った馬田遺跡S R 34出土の土器群とさほど時期差はない。

馬田遺跡との位置関係からも、龍山古墳を含む古墳群の造営集団に馬田遺跡も含まれるのではないか。

### 3. 馬田の中世城館

今回の調査では、城館に伴う遺構や遺物は検出できなかったが、発掘調査中に地元の方から地名など興味深い話を伺うことができた。これには城館の存在を想起させる話もあったため、少しここで触れてみたい。

馬田の東、上友田・下友田地区には、第Ⅱ章でも触れたように街道に沿って多くの中世城館がある。しかし、馬田集落は柘植へ繋がる「伊勢道」からは離れるためか、少ない。『三国地誌』によると、舟見勘解由宅址や山本鞠負宅址・加山氏宅址・森本氏宅址・小林氏宅址があったようである。

しかし、現在馬田集落内で確認されている城館跡は前出集落にある稲端館（居館推定地）である。前出集落は鞍田川右岸に面する。現集落を囲むように、L字に曲がる水路も存在している。この水路は現在はブロックで護岸している。県道上友田円徳院線か

ら前出集落に入る道がこの水路にぶつかる地を集落内では「ホリキリ」と呼んでいるそうである。現在、「掘切」と表記しているとのことである。集落の北西部、民家に接する水田950㎡（字沢田）で平成3年に三重県埋蔵文化財センターが圃場整備に伴う立会調査を実施している。しかし調査の結果、中世の遺物が確認されたが遺構は確認されなかった。したがって、東西120m、南北90mになると推定される。

前出集落から県道を越えて北溝集落に入ると、標高186.9mの小山がある。この小山の西側の辺りは地元では「ジョウヤマ」と呼ばれている。これについては現在、「城山」と表記しているとのことである。また、この西を通る道とそこから西へ伸びる道が交差する地点は「ジョノツジ」と呼ばれている。「ジョ」は「城」を示しているものと考えられる。しかし、馬田集落の北部、即ち上を通る道との理解から、「上（じょう）」が転じたものではないかとの指摘もある。堀や土塁などが残されていないために現時点では推測の域を出ないが、北溝集落の辺りにも城館の存在が考えられる。

今回の調査は馬田遺跡（旧称馬田A・B・C遺跡）初の本格的な調査である。調査の結果、古墳時代時代に当調査区を含むその周辺で集落が営まれたことがわかった。また、細片であるが中世を中心とした遺物が見られたことから、周辺に中世の集落が広がっていることが考えられる。

狭い面積の調査であったため、制限されたこともあり、遺跡の持つ情報を十分に引き出すことができたかと若干の不安もある。しかし今回の調査が、今後、阿山町を中心とした地域の歴史を考えていく上での一助となればと思う。

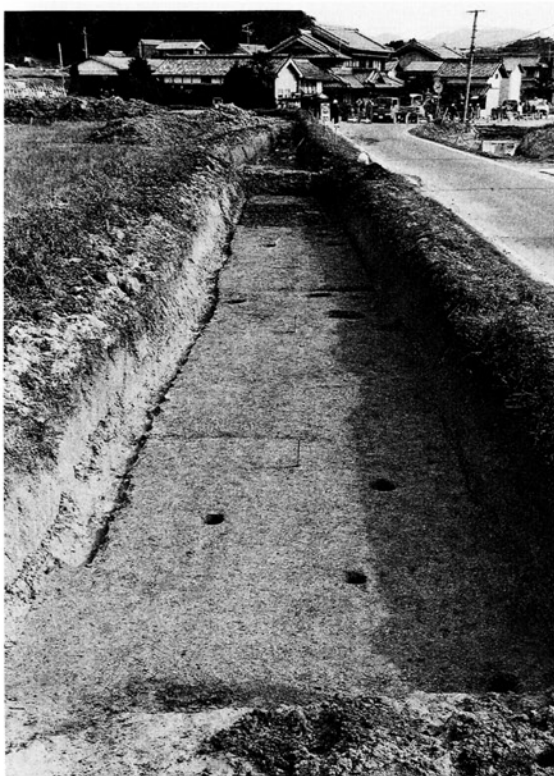
〔註釈〕

- ① 山岡裕・前川友秀・福田典明『久米山48号墳発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1998年
- ② 前川依久雄・堀川敬二・増田博『堂垣内・大多田遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1998年
- ③ 仁保晋作・藤山誠一・大江奈津子・木澤良昭『菰池2号古墳発掘調査報告』伊賀町遺跡調査会、1993年
- ④ 門田了三『尻矢古墳群』名張市遺跡調査会、1995年

- ⑤ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年
- ⑥ 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）
- ⑦ 三重県文化財調査員 寺岡光三氏による



調査前風景



県道北部分西地区（西より）



県道北部分西地区（東より）

図版 2



県道北部分東地区 (東より)



作業風景



県道南部分 (東より)

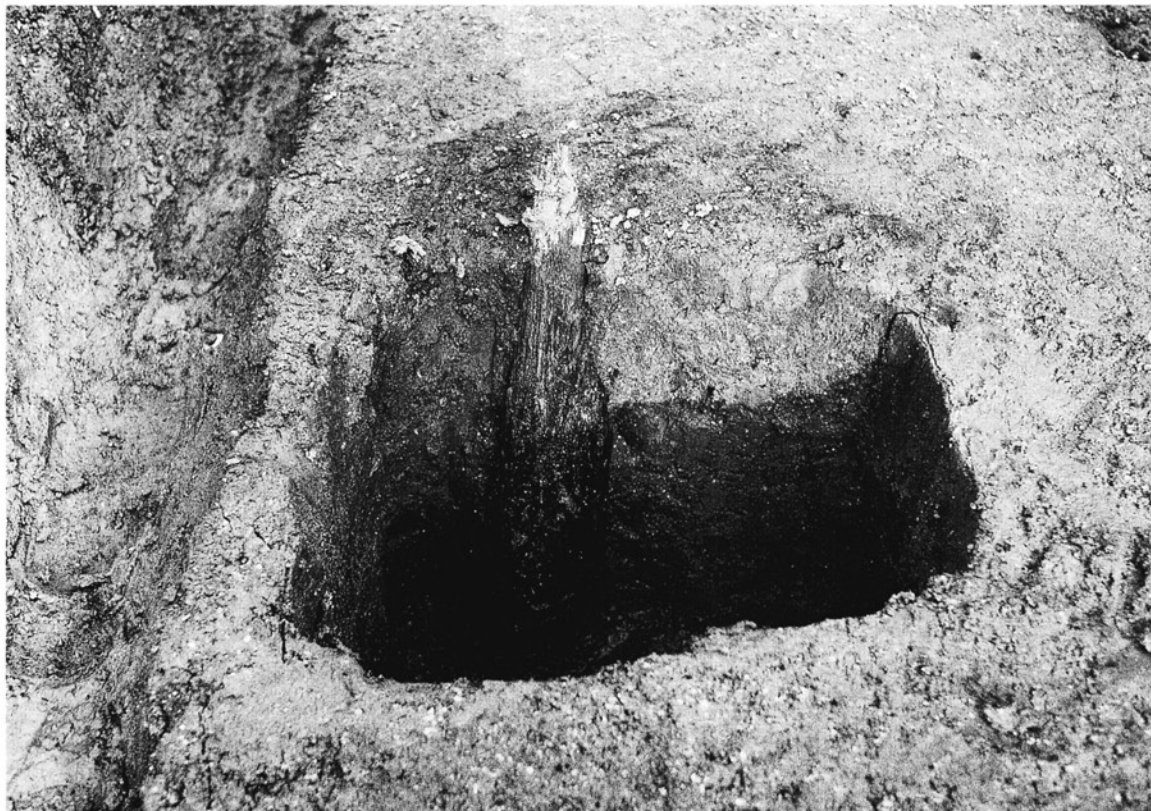


pit17 土器出土状況



pit21 土器出土状況

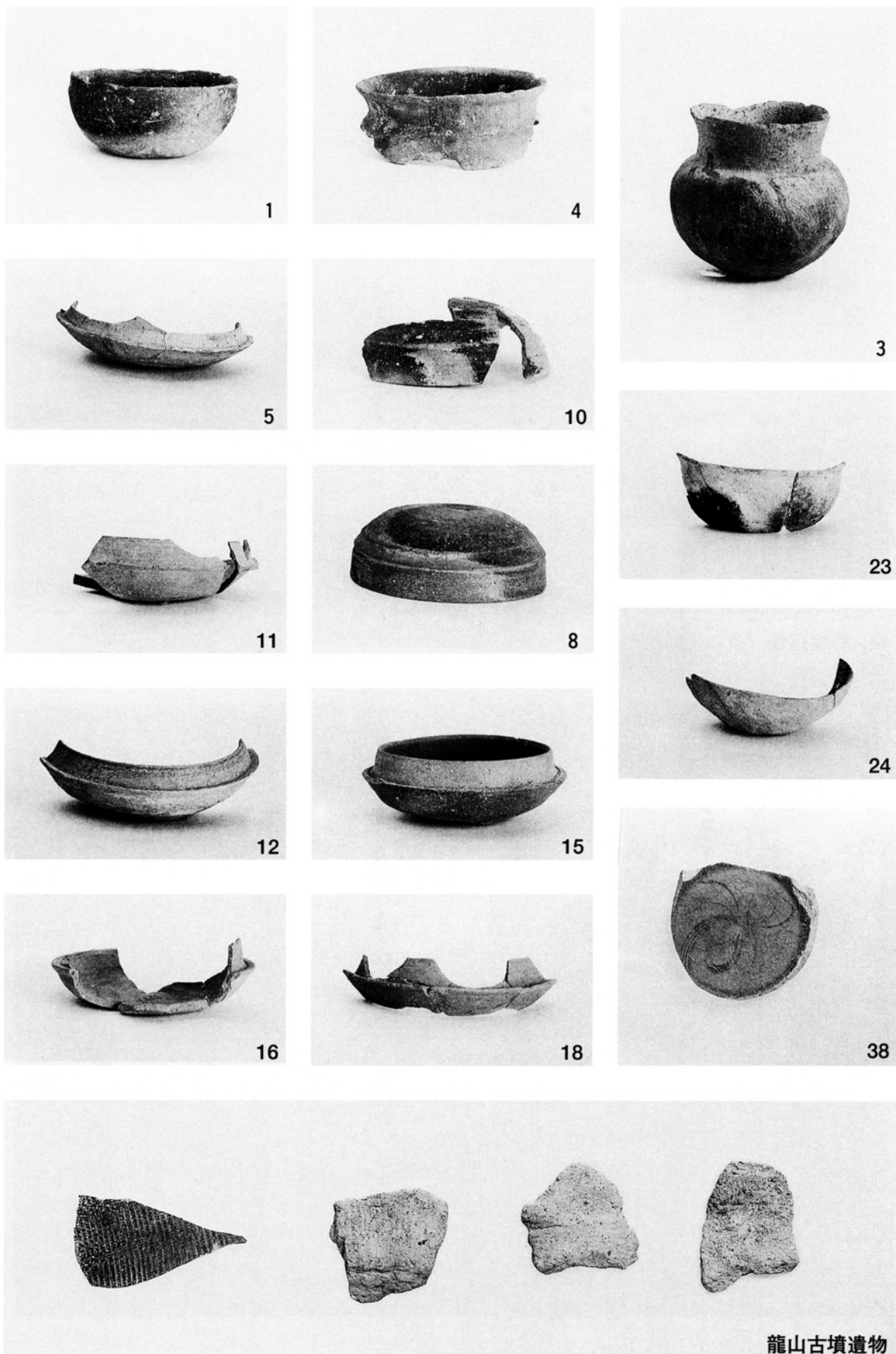
图版 4



pit33 柱材出土状况



S R 34 板材・須惠器出土状况



龍山古墳遺物

出土遺物 (1~24は1:4、38・龍山古墳遺物は1:3)



図版 6



龍山古墳遠景（西より）



龍山古墳

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ばた いせき はくつちよう さ ほうこく
書 名	馬田遺跡発掘調査報告
副 書 名	三重県阿山郡阿山町馬田所在
巻 次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	192
編集者名	川畑由紀子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 ☎0596-52-1732
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばた いせき 馬田遺跡	みえ けん あ やまぐん 三重県阿山郡 あ やまちょう ば た 阿山町馬田	24483	234	34° 49' 49"	136° 10' 59"	19981002 ~ 19981120	400	平成10年度一般 道上友田円徳院 線県単道路改良 工事に伴う緊急 発掘調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
馬田遺跡	集 落 跡	古墳時代 (後期)	掘立柱建物・ 小穴・溝・流路	須恵器蓋杯、土 師器碗・壺・甕	
		中 世		瓦器皿・碗、土 師器小皿・鍋、 青磁碗、天目茶 碗	
		時期不明	掘立柱建物		

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 10 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 192

## 馬田遺跡発掘調査報告

—三重県阿山郡阿山町馬田所在—

1999年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 文 化 印 刷 有 限 会 社

---